

本論文は、鯖江市の眼鏡枠産業の内部構造と近年のその変化を考察するとともに、市内の他の主産業として繊維業・農業をあげ、それらとの関連を例示することにより、地域との結びつきについて考察することを目的とした。

眼鏡枠製造業者はフレーム（完成品製造）メーカー、部品メーカー、中間加工メーカーに分けられる。フレームメーカーを中心に部品メーカーや中間加工メーカーへ、或いは他のフレームメーカーへ外注される分業体制をとるが、一つの企業は数多くの外注先を有し、相互に複雑な関係を持って産業地域集団を形成している。

これらメーカーの他、卸業、材料販売業を加えた眼鏡枠産業は大部分が5人未満の零細小規模である。中でも中間加工メーカー、特に組立やロー付工程のメーカーが零細で家内工業的である。

産地の構造の変化は、大手フレームメーカーのグループ化強化、レンズメーカーなどのナショナルメーカーの進出等によって、近年進みつつある。最も影響をうけるのが中間加工メーカーの中でも小規模なものである。

大手フレームメーカーのグループ化強化の動きには内製化や卸部門への進出がある。内製化のきっかけはチタニウムフレームの商品化であったが、納期、品質、デザインの漏洩防止の面からも内製化が進められることとなった。内製化の動きに伴い、外注先は数がしばられ、その関係を密にしようとする傾向が生じている。

また中央のレンズメーカー等は、企画・デザイン・販売・在庫などの商社的役割を果たし、産地の大手フレームメーカーに全面的に生産委託をし

ているが、品質管理は念入りで委託メーカーからの外注先も指定される。これらの進出が進み、委託メーカーにおける生産比率が高まるにつれ、産地内の構造にも変化をおよぼすであろう。

鯖江市において眼鏡枠産業は明治38年に農村の副業として導入された。それ以前から地場産業として繊維業・漆器業がある。この内、繊維業は現在眼鏡枠産業とともに市の製造出荷額等の約3割を占める。しかし、かつては約7割をも占めており、その地位は眼鏡枠産業とは対照的に低下してきている。それに伴い、繊維産業従事者から眼鏡枠産業への転向も見られる。工場への勤務の他、自営としては技術を要さない部品メーカー等の創業が多いと考えられる。これらは、鯖江市内でも眼鏡枠産業の中心地をなす北東部においては特に多いのではないかと。農業との兼業については、北東部の場合、次第に眼鏡枠製造のウエイトが重くなって農業の規模縮小を図り、現在兼業している農家は小規模な経営である。工場勤務の場合はその工場の規模は農家の規模とは対照的となる。

このような地域との結びつきは鯖江市内でも集積度の高い地域ほど強い。

鯖江市における眼鏡枠産業の重要性は、今後も高まっていくであろうが、一方で眼鏡枠産地としての鯖江市の地位は下がる傾向にある。福井産地の中においても、規模拡大、内製化を図る大手メーカーを中心に鯖江市の近隣地域へ広がっており、今後更にその傾向は強まるのではないだろうか。また円高基調の中でアジアNIESの部分品輸入や現地生産などの海外との分業体制も進むであろう。

砺波市におけるチューリップ球根栽培の地理学的考察

島 晴 己 子

近年わが国における花卉の需要は著しく増加しており、私達の周囲にも多くの切花、球根類がみられるようになった。庄川扇状地の扇央部に位置する富山県砺波市庄下地区は、昔からチューリップ球根栽培のさかんな地域で、現在でも県内のチューリップ球根栽培の中心であり、日本における輸出用球根の大部分を生産している。この地

は、富山県内の他の平野と同様に、水稻単作地帯といえるが、チューリップ球根はその中でも異色ものとして注目される。従って、特殊な集落形態をもつ砺波市の農業及びチューリップ球根栽培の最近の動向を調べるとともに、農業集落の景観、社会的変化や他産地との比較により、その成立要因を考察する。また、農家の実情をうかがうこと

により、チューリップ球根栽培農家の抱える問題をみてみたいと思っている。

砺波市はわが国でも代表的な散居村地域であり、その耕地のほとんどが水田である。この地にチューリップが導入されたのは大正7年といわれているが、その後水田裏作として発展していった。気候・土壌条件等の自然条件に恵まれていたこともあるが、歴史的基盤・独自の組合組織など様々な要因がその発展理由として考えられる。特に、富山県花卉球根農業組合は県唯一の専門農協として生産・販売・出荷を一手にひきうけており、組織的な栽培指導をおこなっている。従って、他の球根産地と比較しても、切花等よりも球根栽培に力を注ぎ、計画的・総合的な生産・出荷をすることができる。

このように、しっかりとした組合組織を背景に、海外への輸出も早い時期からおこなわれていたが、それも25年ほど前から大きく変化してきた。最初は大規模な整備や高度経済成長による兼業化の進展で、栽培者数・出荷数・栽培面積数が昭和40年代から激減したのである。それも、技術の進歩・改良で対応されたのだが、再び円高問題が明らかになってきた。それまで輸出を中心に出荷をしてきたのが、その方法では輸出球数も伸び悩む一方で球根生産者の生活も維持することが困難になっていった。そこで球根組合の側でも、栽培技術の向上や新品種の改良に努力する一方、出荷をそれまでの輸出中心型から国内直販にウェイトをおく方向に変換したのである。このため、消費者のニーズに対応したこまやかな販売や、新商品・アイデア商品の開発に力を入れている。

次に庄下地区におけるチューリップ球根栽培の事例を調べた。庄下は富山県のチューリップ栽培が始められた場所であり、現在も砺波市の球根栽培者の約3分の1が集まっている地域として、富山のチューリップの代表地となっている。この庄下地区での球根栽培農家の分布状況、栽培面積の推移を土地台帳からまとめてみると、次の事実がわかった。

①栽培農家数は減少傾向にあるが、栽培地の集約化が進み、各農家が大規模化してきている。

②栽培農家は、地区の中でも耕土の条件がいい西側に集まっており、東側には現在では全く農家の広がりがみられない。

以上のことから、庄下におけるチューリップ球根栽培は、他の地域と同様に、自然・社会条件の影響を受け変化しており、この意味でも庄下は富山県の球根栽培の典型的な地域といえる。

科学や技術の進歩にもかかわらず、農家のチューリップ離れは深刻化する一方である。特に若年者は農業よりも会社勤めをする方が多く、生産者の高齢化や後継者不足が大きな問題となってきた。また、チューリップ大国のオランダが日本に進出してきており、国内生産地は、とても大変な立場にたたされている。

このような様々な問題を抱えながらも、チューリップは富山の花として、北国の春を色どる景観の一つとして、これからもずっと存続し発展してゆくであろう。そして、新しい時代に向かって、オリジナリティあふれる砺波のチューリップが、今後も私達の目を楽しませてくれるよう希望している。

八王子市における農業の水利用

高山 浩子

農業の水利用は、稲作には河川水を利用し、畑作には雨水を利用するのが一般的だが、その他にも地域の特性に応じた様々な利用法がある。本論文では、農業を水利用の面から捉え、八王子市の農業用水の水源を分類することを目的とする。また、八王子市は都市化の進展が著しく、農業の水利用にもその影響が大きく表われている。そこ

で、同時に農業の水利用という立場から八王子市の都市化と農業との関係を捉え、八王子市の農業の実態を明らかにしていく。

八王子市は、都心から約40kmの首都圏に位置し、総面積は、187.79km²、人口は約43万人である。古くから交通の要衝として交易等で繁栄し、農家の副業から始まった織物業は八王子の中心産